

学会の新たな飛躍を願って

理事長 橋本光明 (信州大学)



この度、引き続き理事長を仰せつかり責任の重さを痛感いたしております。平成20年度の当面の課題は、学会運営組織の抜本的な見直しでした。理事長在任の大学に事務局を置く今までの運営のあり方を根底から変えるために事務局を廃止して総務局を新設しました。併せて役員の任務内容や学会開催大学の持ち方などを検討することで、今日の教育を取り巻く厳しい状況に対応する組織体制の整備を図ることにしました。

組織づくりや運営方法の改善に伴って会則等の改正をはじめ会計事務や会員管理等の業務の効率化と正確な遂行などが挙げられます。これら見直しの方向性や主たる改善点を20年3月の拡大理事会で提案し了承いただきました。その後、2週間という短い期間でしたが、それぞれの任務に熱意と誠意をもって取り組んでくださる方々が決まりました。11月の高知大会の開会式におきまして新担当者の紹介と挨拶の時間をとらせていただきましたが、新装なった本会報であらためて紹介します。これを機に会員の皆様との連携を深めてご要望やご期待に応えられる会にしたいと思っております。

総務局は、総務局長、総務部長、総務部理事としてさまざまな課題に対処すると共に新規課題にも取り組めるようにしました。また、会計事務や名簿作成・住所変更などの会員管理、発送などの煩瑣な仕事を民間に委託し事務部を設けました。なお、学会の開放性を一層推し進めるために私学の会員も総務局のメンバーに加わっていただき新しい視点から改善点を見出したいと思っています。将来的には国公立や校種等の垣根を超え、お互いの特色を生かした企画・運営の実現を期待しています。総務局構成員は、総務局長の所属地区とその隣接地区を中

心に委嘱しました。

年8回ほど(総務局会と理事会)の全

会議に出席することや交通費補助が些少のために委嘱する地区を限定したことをご理解ください。

現段階では、新組織による円滑な運営に力を注ぎますが、その先にあるのは学術研究と実践研究との密接な関係による研究の成果を通して学校教育や社会等の発展に資することのできる本学会の充実です。このためのビジョンや方策、基盤づくりなどについては、内なる課題と共に外部との関係も視野に入れております。役員はじめ関係の方々との協議を重ねながら着実にかつスピード感をもって進めていきたいと考えています。

最後に前述の学会の開放性についてふれておきます。本学会は、全国美術部門(設立当時は「第二部美術部門」、第一部は学長・学部長等、第二部は大学教官、第三部は附属学校教官等から構成)の研究発表からはじまりました。これを発展させて昭和38年に「大学美術教育学会」を設立しました。このため学会員は、全国美術部門に所属する教官(当時)に限られていました。

この閉ざされた学会を開放したのは昭和63年の富山大会からです。これを契機に平成元年から部門と学会との関係を少しずつ切り離してきましたが、未だに両者の関係が重なり合っていることから本学会を完全に開放するまでに至っていません。この関係を明確にすることも近々の重要課題といえます。

難問山積ですが会員の皆様のご助力、ご協力を賜りながら邁進していく所存でございます。

3年間を振り返って

副理事長 佐藤哲夫（新潟大学）

学会の諸問題が、大学や研究者を取り巻く状況の変化と共に益々顕在化して来て、学会見直しに着手しなければならないということになりました。最初の内は、取りあえず学会誌委員会マターとして、私的に西村俊夫学会



誌編集委員長や、改革の必要性を感じている数名の方が集まり意見を交わしました。

ネットの活用という考えが打ち出され、ホームページデザインや大まかな費用の見積を出し、橋本光明学会理事長にお示しするところまで行きました。しかし、この案は現実化に不安があるということで、取りあえず棚上げになり、代わりに橋本理事長の発案、主導によって総務局が新たに創設されることになりました。

学会理事長・部門委員長という立場からすれば、全体を見渡した熟慮による現実的で手堅い改革が必要条件であり、まずは、学会運営の効率化に焦点を絞るべきだという判断をされたのだらうと思います。先の私たちの話し合いの論点は、もっと美術教育のホットな議論が飛び交い、そこから研究者同士の共同も生まれるような活気ある場にしなければ学会の存在意義はないということが主眼であり、そのために、限りある資源（資金や労力）の配分法の見直しが必要であるということでした。良くある現実論と理想論の違いかもしれません。しかし、両者はプロセスについての認識が異なるだけで、同一線上に在ると信じています。

体制の改変に伴い、やむを得ず異例に三年間も学会誌委員長の座に居座るはめになってしまいました。委員の皆様、会員の皆様に学会誌改革の実が上げられなかったことを恥じつつ、次期学会誌委員長にバトンをお渡しします。長い間ありがとうございました。

大学美術教育学会の意義の再考

副理事長 西村俊夫

（上越教育大学）



今年度発行の学会誌第41号の掲載論文が48編である。昨年度の第40号が62編であった。

ここ10年くらい150編程度の論文が掲載されているが、以前は掲載論文数がだいぶ少なかった。学会誌のサイズがB5版からA4版に替わったのが1994年で、丁度この頃から論文掲載数が増えたようである。学会の規約が変更したことなどがその主な理由と思われるが、何より教員養成大学における「論文」が持つ意味が変わったのであろう。

1983年に発行された『日本教育大学協会第二部美術部門・大学美術教育学会 資料集』によると、学会の設立が1963年で、学会誌の第1号は1969年に発行されている。掲載論文数は7編と記録されている。これ以前には研究紀要として出されていて、第17号までであったようである。設立時の会則をみると会員は「教育大学協会第二部美術部門の会員とする」とあり、学会事務所は「第二部美術部門本部におく」とある。その後何度かの会則の変更を経て「本会の主旨に賛同する」ものであれば誰でも入会できるようになった。事務所の問題や運営の問題も、この度の橋本理事長のもとでの組織改革で総務局が設置されるなど、大きく変わった。

上記のような設立時の事情により、大学美術教育学会と日本教育大学協会美術部門との「表裏一体の関係」が長く続くことになるが、このことが生み出す様々な問題や弊害が指摘されてきた。例えば閉鎖性やある種の権威性などである。しかし、戦後出発した新しい教員養成制度の中で、「美術」という教科・領域の教員養成の体制を整えるために必要な仕組みであったようにも思える。この資料集によると、当時、美術部門委員長から文部大臣宛に中学校美術科時数の増加や教職免許法改正に対する要望書などが度々提出されている。こうした要望の根拠となる理論や実績をつくり出すためにも学会が必要であったのであろう。また当時、全国的な規模で学会を組織できる存在が他にはなかったのであろう。結果的に、この学会は各領域の実技教員を含め美術の教員養成にかかわる様々な専門の教員が会員となった。このことの意味は大きい。今回、部門では教科内容学を考えるWGが立ち上がった。これを支えるためにも学会の果たす役割は大きい、と考える。

討議の場としての学会を

常任理事 藤澤英昭（千葉大学）

大学闘争を経験した世代が表舞台から後衛に回ろうとしている。あれ以来「敵」を設定しにくくなっている。いま大学ではだんだん空気が薄くなって、軽いめまいや窒息感がある。意識は液状化している。何をすべきかと問う時に、あまりに些末なことであったり、政治的嗅覚を奪われた法外な夢であったり。



このような状況で学会は一時の避難場所であるかもしれない。しかしこの学会に参加する人々は我が国のかなり大きな部分の当事者であり、責任者である。評論家ではない。内部にいる。加害者と被害者という対立軸が許されるならば当然ながら加害者である。

美術にかかわる教育的な営みがどうしても子どもに必要なのだと繰り返して問い、繰り返して否定してみる。人が生きていくことに根底的にかかわるのだと私たちは考えているかもしれないが、本当だろうか。

誰にでもわかる主張が展開されることを願っている。

昭和 20 年前後に生まれた教員が大学を去っていく。彼らは戦後の教育をいわば被教育者として生き、さまざまな実践理論を構築してきた。戦後の眩しいぐらいの教育熱の中では多くの美術教育団体が興った。その熱い議論と実践を体験してきた。

「絵を描く子供たち」、「黄色いカラス」などの美術教区映画は一般の劇場で公開され、多くの観客を呼んだ。

誰もが美術教育の重要性について話した。それぞれの団体の内部で激しい論争があったのだろう。

熱い議論を交わす場として大学美術学会が飛躍することを考えている。

「内外の力を結集して」

常任理事 藤江充（愛知教育大学）

大学美術教育学会は、2008 年度の橋本光明理事長による機構改革によって、美術教育の振興のためにより充実した組織として発足することになりました。それにともない、あらた



に常任理事という役職に任命されました。私自身も会員として 30 年以上にわたり、この会にお世話になって来ました。少しでもご恩返しができればと思い、就任いたしました。

美術教育をめぐる現状は、アートの広がりの中で造形や美術を教育という場でどうとらえるか、学校教育の制度や教育行政の変化のなかで、アートとその教育をどのように位置づけるかが課題になっています。こうした課題を解決していくには、子どもの成長が目に見える実践で美術教育の意義を示していくと同時に、そうした実践を支える説得力のある理論が構築されていくことが求められています。

大学美術教育学会は、教員養成系大学・学部の教員を中心として発足しました。現在は、大学院学生、幼小中学校教員、私立大学の教員、さらに、美術館等で美術教育にたずさわる会員など、美術教育の実践・研究にかかわる多様な会員で構成されています。こうした会員が力をあわせて、美術教育に課せられた課題を解決していくことに、微力ながらお手伝いをさせていただければと考えています。

また、会の内部の結集はいうまでもありませんが、美術教育関係の他の学会や諸団体とも広く連携していく必要を感じています。そうした連携への橋渡しを、会員の皆様にご協力をいただき、進めていければと思っています。

「総務局長」をお受けして

総務局長 増田金吾（東京学芸大学）

平成20・21年度の総務局長を仰せつかりました。組織を新たに、大学美術教育学会や日本教育大学協会全国美術部門を改善して行きたいの



で協力して欲しいと、橋本理事長から説得されました。非力を自覚しながらも、新しいこの役目をお引き受けした次第です。

本学会は、昭和38(1963)年に発足しました。それまで研究発表は、昭和27年に発足した「日本教育大学協会第二部美術部門」(国立教員養成系大学・学部的美術科教官で組織、略称、二部会、現、教大協全国美術部門)の全国協議会で行われていました。

学会発足当初、事務所は二部会本部(委員長所属の大学)に置かれ、会員は二部会会員を原則としました。その後、門戸は徐々に広げられ、現在に至ります。

そうした経緯もあり、本学会は長く部門と学会が表裏一体をなして運営され、事務所(局)も部門委員長兼学会理事長の大学に置かれてきました。こうした運営体制はこれまで、大方協力的になされてきました。しかし、時の流れと共に、次第に運営維持が困難となり、5年前の法人化によってその傾向に拍車がかかりました。大学教員の負担は、今日増すばかりです。

そうした状況下での橋本理事長の英断でした。総務局メンバーが理事長より委嘱され、各地から集められました。学会運営のために、総務局のスタッフは各自の時間を割いてことに当たってくれています。それは我が国の美術教育発展のために、という気持ちがあるからだと思います。総務局スタッフの力を借りながら、役割をなんとか果たして参りますので、会員の皆様にはご協力を賜りますようお願い申し上げます。

総務局員挨拶

学会活動の質的向上のために

学会総務部長 山口喜雄（宇都宮大学）

わが国の主な学会等(創立年/筆者が1992年統計の構成員数,連合のみ1998年)は創立順に日本美術教育学会(1951年/359名),大学美術教育学会(1952/694),日本美術教育連合(1953/245),美術科教育学会(1979/436)の四つがあり,総計1734名でした。当時の40%を本学会が占め,国内最大の構成員を有しています。その後,15年余を経て全国的な大学院の設置増により重複入会者も含め,各々の会員数は増加していると推定されます。また,学会の統合も議論されはじめており,学会活動の質的向上が求められています。より多くの会員のみなさんの叢智を集め,活発な研究活動の推進のためにご協力をお願い申し上げます。

私も微力を尽くす所存です。

挨拶

部門総務部長 山田一美（東京学芸大学）

現在、職場では数年後の学部改組を考え、各コース・教室カリキュラムの設計に取りかかりつつある。その委員会等の活動を通し、教育実践演習のほかに、美術部門を左右する二つの点に気づかされた。一つは「小学校の教科に関する科目」の必置体制であり、もう一つは中・高美術・工芸のための「教科に関する科目」すなわち絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論及び美術史の必修継続と在り方である。今後、断続的な免許法改正とともに、美術部門は、この課題についての共通認識と見解を確保し、教育大学協会や文部科学省、教養審に対して明確な意志を示せるよう、議論を積み上げ、見解を熟させておく必要があると考える。

総務局員ごあいさつ

総務部理事 新関伸也（滋賀大学）

国立大学の法人化後、予算減の中、教員養成大学・学部は厳しい運営が迫られています。そこでは、現状分析に基づき大学の特色を生かしながら、目標や計画が策定されています。

本学会は教大協美術部門と表裏をなして今日まで至っていますが、大学同様、将来を見据えた諸改革が急務となっています。実務的な改善はもちろんですが、その基本とすべき理念は、大学における教科教育と教科専門の緊密な連携によって美術教育を底上げし、今以上に理論と実践の研究を促進することではないでしょうか。美術教育への逆風を防ぐには、双方、孤立無援ではられません。

橋本理事長のもと総務局員として微力ではありますが、努力する所存です。ご指導とご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

新体制に向けて

総務部理事 藤田英樹（信州大学）

19年度、学会事務局長を務めさせていただきましたが若輩ものの私には大変荷の重い仕事でした。いろいろな面で至らぬ点があり、会員の皆様には大変ご迷惑をお掛けいたしました。この場を借りてお詫び申し上げます。20年度からの新体制の中で改めて総務局員として学会誌関係及び民間への事務移行等の業務を担当させていただいております。この1年で急激に学会の体制が変わり、今までの単一大学持ち回りの事務組織から、適材適所に人材を配置する総務局体制となりました。急激な改変故の問題点もあるかとは思いますが、学会の本来の目的を遂行していくために有意義な変革であったと感じています。学会運営に関して今後とも会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

挨拶

総務部理事 三澤一実（武蔵野美術大学）

私学代表として橋本理事長より総務局員を命じられました三澤です。さて、今日の造形美術教育を取り巻く状況は決して楽観できる状況ではありません。むしろ危機さえ感じます。例えば、大学の入試

状況を見ても美術系を希望する受験生は年々減少の傾向にあります。その一つの原因は中学校の美術科の時間数減でしょう。かつてはできた題材も今となっては規模を縮小したり題材数を減らしたり、結果として子どもたちに造形美術の豊かな体験を提供できなくなってきています。このような現状を鑑み、未来の美術教育を支えるために本学会ができることを模索しつつ、私学との連携、現場とのネットワークづくりに取り組んで行く所存です。どうぞよろしくお願いたします。

挨拶

総務部理事 芳賀正之（静岡大学）

学会運営の充実や活動を促進する上で、ホームページが必要となります。学術研究団体登録申請においても、サイトの開設が条件の一つとなることから、平成20年度内に学会のホームページを立ち上げることとなりました。学会のホームページを作成し、それを運営していくには、サーバー、ソフトウェア、管理者といった問題があります。この点を踏まえた上で検討し、昨年度の高知大会に併せ、試行という形で開設しました。その後の拡大理事会において正式に認められ、以降、サイトを構築中です。学会のWebサイトは、Wikiを使い作成しています。WikiによるWebサイトの特徴を活かし、将来的に、会員が情報交換としてサイトを活用することができればと願っています。

人・もの・ことが出あう場

総務部理事 大泉義一（横浜国立大学）

学会は、人やものやことが出あう場、交錯する場であると考えています。そうした魅力にひかれて、人はそれに参画するのでしょうか。もちろん私もその一人です。より多くの人・もの・こととの出あいが生き生きと位置付くよう願っていますし、そのために努力していきたいと思います。

私が担当する学会会報は、学会ホームページと同様、会員の皆様の知りたい情報を共有するツールです。今後、研究ノート等の投稿も考えていきたいと思っています。本学会においては、教科専門と教科教育の連携、造形教育の理論と実践そして理念との往還を目指す実証的な研究の取り組みが共有されるべきでしょう。

大学美術教育学会 平成 20 年度役員組織

理事長 橋本光明 (信州大学)
副理事長 佐藤哲夫 (新潟大学)
同上 西村俊夫 (上越教育大学)
常任理事 藤澤英昭 (千葉大学)
同上 藤江 充 (愛知教育大学)

総務局

局長 増田金吾 (東京学芸大学)
学会総務部長 山口喜雄 (宇都宮大学)
部門総務部長 山田一美 (東京学芸大学)
総務部理事 新関伸也 (滋賀大学)
三澤一実 (武蔵野美術大学)
藤田英樹 (信州大学)
大泉義一 (横浜国立大学)
芳賀正之 (静岡大学)
事務部長 佐藤聡史 (民間)
事務部員 柳澤 愛 (民間)

地区代表理事

(北海道) 佐藤昌彦 (北教大学札幌校19-20年度)
福山博光 (北教大学岩見沢校20-21年度)
(東北) 蝦名敦子 (弘前大学19-20年度)
煤孫康二 (岩手大学20-21年度)
(関東) 栗田真司 (山梨大学19-20年度)
横尾哲夫 (埼玉大学20-21年度)
(北陸) 隅 敦 (富山大学 20年度)
高石次郎 (上越教育大学20-21年度)
(東海) 宇納一公 (愛知教育大学19-20年度)
辻 泰秀 (岐阜大学20-21年度)
(近畿) 新関伸也 (滋賀大学19-20年度)
長谷川哲哉 (和歌山大学20-21年度)
(四国) 山木朝彦 (鳴門教育大学19-20年度)
安藤恭一郎 (香川大学20-21年度)
(中国) 内田雅三 (広島大学19-20年度)
小野山和男 (岡山大学20 - 21年度)
(九州) 池川 直 (鹿児島大学 19-20年度)
永津禎三 (琉球大学20 - 21年度)

私学代表理事

阿部寿文 (大阪女子短期大 19-20 年度)
水島尚喜 (聖心女子大学 20 - 21 年度)

監事 石川 誠 (京都教育大学19-20年度)
上野行一 (高知大学20 - 21年度)

学会誌委員会

委員長 佐藤哲夫 (新潟大学)
編集委員長 西村俊夫 (上越教育大学)
19-20年度委員 佐々木宰 (北教大学釧路校)
降旗 孝 (山形大学)
渡辺晃一 (福島大学)
金子一夫 (茨城大学)
岩村伸一 (京都教育大学)
岩崎由紀夫 (大阪教育大学)
福田隆真 (山口大学)
阿部 守 (福岡教育大学)
水島尚喜 (聖心女子大学)
20-21年度委員 本村健太 (岩手大学)
茂木一司 (群馬大学)
直江俊雄 (筑波大学)
松本健義 (上越教育大学)
上山 浩 (三重大学)
佐藤賢司 (大阪教育大学)
佐々有生 (島根大学)
中村和世 (広島大学)
山木朝彦 (鳴門教育大学)
佐藤史子 (愛媛大学)
池川 直 (鹿児島大学)

国際交流委員会

委員長 山口 喜雄 (宇都宮大学)
委員 向野 康江 (茨城大学)
直江 俊雄 (筑波大学)
池内 滋胡 (福井大学)
藤江 充 (愛知教育大学)
鈴木 幹雄 (神戸大学)
福本 謹一 (兵庫教育大学)
中村 和世 (広島大学)
福田 隆真 (山口大学)
安東恭一郎 (香川大学)
金子 直正 (高知大学)
仲瀬 律久 (聖徳大学)
浜本 昌宏 (名誉会員)

学会誌編集委員会

委員長 西村 俊夫 (上越教育大学)

平成 19 年度事業報告

平成 19 年度会計報告

〔平成 19 年〕

- 5月中-下旬 役員委嘱交渉
- 6月14日 19年度諸手続文書発送 「兵庫大会」開催通知
- 6月16日 第1回学会理事会（新橋・航空会館）学会誌委員会、国際交流委員会、学術団体登録準備委員会<仮称>の各委員会の開催（同上会館）
- 6月下旬 第46回大学美術教育学会「兵庫大会」案内発送（マルチエントリー申込システムの導入）藤田事務局長代行を事務局長とする
- 7月下旬 学術団体登録準備委員会<仮称>を学会運営検討WG委員会として正副委員長及び委員を決定し、委員長が承認する
- 9月中旬 大学美術教育学会「兵庫大会」第2次案内発送
- 10月中-下旬 平成18年度会計監査
- 10月20日 大学美術教育学会「兵庫大会」参加申込締切
- 11月3日 第2回学会理事会（神戸・兵庫県学校厚生会館）（協議）日本学術会議協力学術研究団体、学会誌検討WG委員会等各委員会開催（同上）
- 11月4日 大学美術教育学会「兵庫大会」開会式・シンポジウム・研究発表・合同懇親会（神戸国際会議場）
- 11月5日 研究発表・学会総会（神戸国際会議場）総会において委員長提案の学会改革方針を承認 *改革案を3月の理事会で検討、承認することで20年度から施行し、11月高知大会総会で事後承認することを総会で決定 大会開催大学引継ぎ会（兵庫教育大学高知大学）
- 12月中旬 WGによる日本学術研究団体申請準備状況や学会誌検討及び事務の民間委託案などを委員長に報告
- 12月22日 次期委員長選考委員会（新島：直江津）

〔平成20年〕

- 2月21日 選考委員会結果報告 現理事長の継続を全理事へ報告
- 3月6日 委員長から全理事、委員等へ学会改革案を提出
- 3月17日 第3回学会理事会、学会誌委員会等各委員会（東京文化会館会）次年度理事長の継続を承認 学会改革案及び新組織、事務の民間委託などを承認
- 3月下旬 学会誌40号刊行、学会会員名簿作成完了

収入の部

（単位 円）

費目	平成19年度 予算案	平成19年度 決算	増 減	備 考
前年度繰越金	720,037	720,037	0	
会員年会費				
内訳	1,900,000	1,735,000	-165,000	大学会員347人
	1,360,000	1,510,000	150,000	個人会員302人
小計	3,260,000	3,245,000	-15,000	5,000X649人
賛助会費	0	0	0	
学会誌掲載料	1,625,000	1,600,000	-25,000	25,000X64人
雑収入				
広告掲載料	0	0	0	0件
利子	400	1,936	1,536	
開催大学返金	0	0	0	
その他	0	6,000	6,000	学会誌売上2件
小計	400	7,936	7,536	
合計	5,605,437	5,572,973	-32,464	

支出の部

（単位 円）

費目	平成19年度 予算案	平成19年度 決算	増 減	備 考
事業費				
研究大会補助金	150,000	150,000	0	兵庫教育大学へ
研究大会特別補助金	60,000	60,000	0	兵庫教育大学へ
概要集刊行費	300,000	300,000	0	兵庫教育大学へ
学会誌刊行費	2,800,000	2,990,019	190,019	
学会会報刊行費	80,000	0	-80,000	
学会通信刊行費	40,000	10,434	-29,566	
会員名簿刊行費	400,000	211,000	-189,000	
国際交流補助金	40,000	0	-40,000	
講演会等分担金	30,000	30,000	0	兵庫教育大学へ
小計	3,900,000	3,751,453	-148,547	
会議費				
常任理事会費	20,000	0	-20,000	
理事会費	150,000	91,518	-58,482	
学会誌委員会	50,000	10,700	-39,300	
委員等経費	200,000	255,280	55,280	
拡大理事会補助金	0	0	0	
小計	420,000	357,498	-62,502	
事務局費				
交通費	150,000	62,010	-87,990	
通信費	300,000	185,710	-114,290	
事務費	300,000	118,803	-181,197	
雑費	45,000	31,063	-13,937	
小計	795,000	397,586	-397,414	
予備費	490,437	0	-490,437	
次年度繰越金	0	1,066,436	1,066,436	

平成 19 年度会計監査報告

平成 19 年度会計監査については、平成 20 年 11 月 1 日、高知大学にて監査委員会が開催され、以下の通り報告されました。

大学美術教育学会

理事長 橋本光明 様


平成 19 年度大学美術教育学会の会計について、平成 20 年 7 月 7 日 監査委員会を開催し、会計監査を実施しました結果、


1. 収支について伝票類と帳簿類を対照監査した結果、それらが正確に仕訳・記載されていました。
2. 収支の伝票類と帳簿類は整理され、収支の内容・使途も明確に記載され、会計が適切に処理されていました。
3. 帳簿差引残高及び貯金・現金残高と決算書との対照も行いましたが、正確であることを確認しました。

以上のごとく、平成 19 年度会計の処理及び決算が正確に執行されていたことを報告いたします。

平成 20 年 7 月 7 日

大学美術教育学会

理事 都築邦春 

監事 阿部 誠 

平成 20 年度事業計画

〔平成20年〕

- 4月上-中旬 役員及び総務局理事委嘱交渉
- 4月26日 第1回総務局理事会、総務局拡大理事会（東京文化会館）
- 5月18日 第2回総務局理事会（淡交社 東京支社）
- 6月21日 第1回学会理事会、拡大理事会（東京文化会館）学会誌委員会、国際交流委員会の各委員会の開催（同上会館）
- 6月30日 第47回大学美術教育学会「高知大会」第1次案内及び学会通信発送、19年度学会会員名簿刊行、発送
- 8月上旬 学会ホームページ開設(試行)
- 9月16日 投稿論文提出締切（登録締切8月8日）
- 10月中-下旬 平成19年度会計監査
- 10月10日 大学美術教育学会「高知大会」事前申込締切
- 10月13日 第3回総務局理事会（東京学芸大学）
- 11月 1日 第2回学会理事会、学会誌委員会、国際交流委員会等開催（高知大学）全美協役員との合同協議会（理事長、総務部長等数名出席）
- 11月 2日 大学美術教育学会「高知大会」開催（高知大学）開会式課題研究、公開シンポ、研究発表、合同懇親会
- 11月3日 研究発表・学会総会、閉会式 大会開催大学引継ぎ（高知大学 愛知教育大学）
- 11月28日 掲載論文提出締切
- 12月上旬～ 学会誌編集作業開始 18、19年度学会会報刊行予定 日本学術協力団体申請準備

〔平成21年〕

- 1月31日 第4回総務局理事会（東京学芸大学）
- 2月上旬 20年度学会会報刊行予定
- 3月中旬 第3回学会理事会、学会誌委員会、国際交流委員会等各委員会同日開催（東京文化会館）
- 3月下旬 学会誌第41号刊行
- 7月下旬 平成20年度会計監査予定

平成 20 年度予算

収入の部

(単位 円)

費目	平成20年度 予算案	平成19年度 決算	増 減	備 考
前年度繰越金	1,066,436	720,037	346,399	
会員年会費				
内訳	1,750,000	1,735,000	15,000	大会会員350人
	1,500,000	1,510,000	-10,000	個人会員300人
小 計	3,250,000	3,245,000	5,000	5,000X650人
賛助会費	0	0	0	
学会誌掲載料	1,250,000	1,600,000	-350,000	25,000X50人
雑収入				
広告掲載料	0	0	0	
利子	600	1,936	-1,336	
開催大学返金	0	0	0	
その他	0	6,000	-6,000	
小 計	600	7,936	-7,336	
合 計	5,567,036	5,572,973	-5,937	

支出の部

(単位 円)

費目	平成20年度 予算案	平成19年度 決算	増 減	備 考
事業費				
研究大会補助金	50,000	150,000	-100,000	高知大学へ
研究大会特別補助金	0	60,000	-60,000	
概要集刊行費	300,000	300,000	0	高知大学へ
学会誌刊行費	2,800,000	2,990,019	-190,019	
学会会報刊行費	100,000	0	100,000	no.19 .20.21
学会通信刊行費	40,000	10,434	29,566	
会員名簿刊行費	0	211,000	-211,000	
国際交流補助金	40,000	0	40,000	
講演会等分担金	0	30,000	-30,000	
小 計	3,330,000	3,751,453	-421,453	
会議費				
運営委員会費	100,000	0	100,000	19年度常任理事会費
理事会費	100,000	91,518	8,482	
学会誌委員会	50,000	10,700	39,300	
委員等経費	250,000	255,280	-5,280	
拡大理事会補助金	50,000	0	50,000	
小 計	550,000	357,498	192,502	
事務費				
交通費	400,000	62,010	337,990	
通信費	200,000	185,710	14,290	
事務費	500,000	118,803	381,197	
雑費	50,000	31,063	18,937	
小 計	1,150,000	397,586	752,414	
予備費	537,036	0	537,036	
次年度繰越金	0	1,066,436		
合 計	5,567,036	5,572,973	-5,937	

第47回大学美術教育学会 「高知大会」の報告とお礼

上野行一（高知大学）

平成20年度日本教育大学協会全国美術部門協議会/第47回大学美術教育学会は、2008年11月2日(日)・3日(月・祝)に、高知大学を会場にして、170名をこえる参加者を得て開催されました。

本大会では、課題研究とシンポジウムが設けられ、それぞれ「鑑賞教育の現状と課題」「新学習指導要領と教員の意識改革」をテーマに、奥村先生と村上先生のおふたりの教育課程調査官をお迎えして活発な議論がなされました。

また、自由研究発表においても55件もの発表がありました。小・中学校の新しい学習指導要領が告示され、また教育職員免許更新制が導入されるこの時期において、それぞれの発表会場では、変革を求められている教員養成の新たな歩みに繋がるような意見交換が行われたことと思います。

InSEA(大阪)世界大会のわずか3カ月後の大会開催でしたが、にもかかわらず参加者数・発表者数ともに例年の水準を維持することができたことに、改めて会員諸氏の美術教育にける熱意を感じた次第です。発表者の中には、学会発表が今回初めてという新鮮な顔ぶれも多く、新しい息吹を感じることができたことも収穫のひとつでした。

大学だけではなく、小学校、中学校、高等学校、行政、美術館と校種・制度を越えた発表者の多様さも特徴的でした。さまざまな壁を越えて協同し、美術の力を社会に発信していくことが求められる現状を映し出した大会ではなかったでしょうか。

活発な議論を行っていただいた提案者、発表者、コメンテーター、指定討論者のみなさま方には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。とりわけ企画、運営、司会等にご尽力いただいた実行委員会のみなさま方に厚くお礼申し上げます。高知大会は、多くの方々の献身に支えられた大会でした。

高知大会が盛会のうちに無事閉会することができましたことを心より感謝申し上げますとともに、次期大会のさらなる発展と成功を祈念して報告を終わります。



第47回 大学美術教育学会 高知大会 自由研究発表プログラム

高知大会

自由研究発表プログラム 1日目 11月2日(日)

幼児教育における総合的な「表現」についての研究	展示の実施と鑑賞教育	交通事故遭遇児童の自我形成期における美術表現にかかわる諸問題	就業に生かすための専門学校美術教育プログラムの構築	絵画における感情表現について
柿田 敏史 (兵庫教育大学大学院)	山岸公基 (奈良教育大学) 天野 歩 (奈良教育大学大学院)	金澤 貴子 (宇都宮大学大学院)	長澤 晋広 (宮城教育大学大学院)	加藤 藤 (福島大学大学院)
幼児の発達に適した鑑賞教育の実践的研究—大学と幼稚園の連携による鑑賞プロジェクトについて—	主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力の育成に関する考察	児童期後期における「創造生活の危機」からの一考察	市民教育における環境芸術の教材化の研究	美術教育における「風景」の解釈—風景論における風景観から
丁子おる・千木木直行・松久公嗣 (福岡教育大学)	立原 慶一 (宮城教育大学)	名達 英昭 (北海道教育大学旭川校)	橋本 恵和 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)	山下 鏡子 (東京学芸大学大学院)
保育者養成校における「造形模範保育」の効果と問題点	学校全体で取り組む彫刻美術展との連携活動	資質や能力の確かな育成をめざす探究的な授業の研究	みる・まき・つくる—地域のアーティストによる造形活動支援の事例研究—	人物クローキーの制作法に関する一考察
松井 寿美子 (聖カタリナ大学短期大学部)	森實 祐里 (札幌市立三井山小学校)	青藤 和史 (大阪教育大学附属天王寺小学校)	田中 圭一 (堺市教育委員会)	橋田 洋明 (鹿児島大学)
自ら多様な見方を発見し、楽しく表現に生かそうとする子どもへ写真を取り入れた造形活動を通して—	たのしければ鑑賞じゃない	美術教育文献のアーカイビングに関する研究	工芸教育の可能性の研究: 鍛鉄ワークショップの実践より	絵画と言葉の関係性について
竹内 とも子 (東京都千代田区立九段小学校)	庄子 展弘 (旭川市立北星中学校)	山口 善雄 (宇都宮大学)	押元 信幸 (山口短期大学)	星 久美子 (福島大学大学院)
コピアートペーパーを使った写真表現の可能性	現代アートの鑑賞から学ぶ、表現へのアプローチ	家庭における働きかけがもたらす美術教育上の効果について—2007年度茨城大学教員養成課程所属学生を対象にした国語工作科・美術科教育に関する意識調査より—	リスクマネジメントの観点による専門教育(美術)の一考察	生徒の思いを引き出す絵画制作
浅見 俊哉	鈴木 斉 (羽村市立羽村第三中学校)	砂野 みゆき (茨城大学大学院)	阿部 鉄太郎 (兵庫県立姫路西高等学校)	八木 遼蒼 (大阪府立三島高等学校)

自由研究発表プログラム 2日目 11月3日(月)

子どもの姿から見えてくる学び	「仕事」の側面から見た地域の風土に根ざしたものづくり教育に関する研究—中国の内モンゴル自治区バヤンリャー地域の子どもの生活を中心に—	線とかたちの分類と体系化—再現性と描画方法に注目して—	国際理解教育を目的としたアートプロジェクト—大学・現場の教師・NPOの連携	清家 南とデザインギャラリー—展—デザインギャラリー—銀座・松屋の事例から—
堀川 基一 (北海道教育大学附属札幌小学校)	包 悟日美佳 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)	松岡 賢二 (兵庫県立姫路別所高等学校)	塩巻 隆子 (ジャパンアートマイル)	土屋 伸夫 (筑波大学大学院)
創造的思考プロセスを支援する学習環境と授業実践に関する研究	子どもの造形活動にかかわるものづくりの場に関する研究	伝統技術の伝承と産学連携を融合した教育者育成プログラムの構築	地域と人を繋げるアートプロジェクトの実践	言語を基にしたデザイン教育に関する研究
横島 三和子・岡田 雅樹 (徳川短期大学)	吉川 暢子 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)	松久 公嗣 (福岡教育大学)	鈴木 眞里子 (文教大学大学院)	横田 夏江
造形表現活動における子どもの学びの生成過程と成り立ちに関する研究—学習研究開発「つなげて のぼして かえてみて」を通して—	工作教育における「つくりたいものをつくる」活動の意義に関する研究	“時”を主題とした表現に関する一考察	公立学校との連携による授業についての一考察—大学生による国語工作科の授業実践から—	構成教育再考—問所春の実践1930～1960「まよひみち」からの考察—
三近 美千穂 (上越教育大学大学院)・松本健義 (上越教育大学)	福井 一真 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)	峰松 由希子 (福岡教育大学大学院)	五十嵐 史帆 (広島大学)	河村 祐憲 (鳥取県八雲町立船岡中学校)
創造的な実践としての鑑賞教育—鑑賞活動の授業分析を通して—	木の特性を活かした立体造形の研究—渡木による立体作品—	絵画の身体性再考	展覧会の可能性を探る—国語工作美術科でも展覧会から	対話で読み解く・図像を読み解く
奥村高明 (国立教育政策研究所)	安部 はるか (福岡教育大学大学院)	石 景岸 (滋賀大学大学院)	三澤 一実 (武蔵野美術大学)	黒木 健 (秋田県立仁賀保高等学校)
「美術における読解力」の実践的研究—子どもと対象の間における読解の深まりについて—	ジャン・バティスト・カルポーの彫刻表現の特徴について—ロダンとの類似点に着目して—	鑑賞教育における教材例「土偶とグリーナス像」の考察—地域から世界への視点—	櫻井英喜のストライプ—1965年のストライプ作品をめぐって—	デザイン・工芸の鑑賞における実物教材の効果に関する研究
武田 信彦 (大阪教育大学附属天王寺小学校)	王 明明 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科)	嶋名 敦子 (弘徳大学)	山本 青	藤澤 学 (山形大学)
中等教育課程における美術学習の可能性	教材と表現	「協同的学びを通して、相互理解を深める対話する美術鑑賞」の研究	空間表現の成長・発達の可能性—小学校でのスキマティック・フローイングの事例から—	生徒個々の発想が生き、楽しさあふれる「私の絵画」—子どもの“育ち”の連続らしさ—
佐々木 六 (芦屋大学附属高等学校・中学校)	西園 政史 (武蔵野美術大学大学院)	澤本 芽 (高知県本山町土佐町中学校組合立嶺北中学校)	村田 利裕 (京都教育大学)	西田 香織 (千葉県立末広中学校)

平成 20 年度学会誌委員会報告

学会誌委員長 佐藤哲夫（新潟大学）

平成 20 年度の学会誌委員会の主な活動は、以下の日程で行われました。（一部予定）

6月21日（土）	第1回学会誌委員会
8月8日（金）	投稿論文登録締切
9月12日（火）	投稿論文提出締切
9月18日（木）	学会誌委員と査読協力者に投稿論文の査読を依頼
10月17日（金）	査読結果返送締切
11月1日（土）	第2回学会誌委員会（高知大会前日）
11月6日（土）	査読結果の通知
12月上旬	学会誌編集作業開始
3月13日（金）	第3回学会誌委員会
3月下旬	学会誌第41号刊行

本年度は、学会の大会が11月2日3日で、それに合わせて第2回学会誌委員会（ここで査読結果を基に再査読作業を行い掲載予定論文を協議決定する）も11月1日に行われたため、論文投稿の締切を、9月12日と遅くすることが出来ました。委員の集まりやすさや負担等を考えると、学会誌委員会は大会開催日に合わせるのが都合がよいのですが、大会は開催大学の都合に沿って決められるため、時期が早くなったり遅くなったりします。しかし、投稿者である学会員にとっては、投稿論文の登録締切や提出締切の日は、毎年同じである方が、うっかりミスも防げ予定も組みやすく親切です。これは21年度の学会誌委員会で、固定化の方向で検討していただければと思います。

次に、学会員の大きな関心事だと思われる平成20年度の「大学美術教育学会誌 第41号」に関する掲載論文関係のデータを挙げます。なお（ ）内は平成19年度データです。

投稿登録（申込）数	85編（91編）
受理した論文数	60編（76編）
無条件で掲載可となった論文数	29編（46編）
修正で掲載可となった論文数	19編（18編）
（1件辞退があったため）	
学会誌掲載論文数	48編（64編）

投稿申込数に対して実際の投稿論文数が少なかったのは、8月に InSEA の世界大会が大阪で開催された影響かもしれません。近年大学は、夏休みといえども、まとまった時間を研究や執筆に充てるのが難しくなっていると思われますが、この数字が一時的なものであって欲しいと思います。

また、学会誌掲載論文数の、受理した論文数に対する比率でみると、今年度は82%、昨年度は84%でほとんど同じであるにも関わらず、修正条件無しでそのまま掲載可となった論文の比率は48%と、昨年度の61%に比べてかなり少なかったのも今年の特徴です。理由は定かではありませんが、学会誌の命題である質の向上に向けて、査読者の判断基準が全体として高くなったのかもしれませんが、もっとも、査読の在り方に関して、依然として解決されていない問題は多々あります。その中でも最大の問題は、査読者の人材不足です。単に厳しい評価をするということではなく、よりよい論文に仕上げてもらうために、具体的で的確な修正のためのコメントを付すことが出来る必要があります。そのためには、論文テーマに精通していなければなりません。しかし、そうでない論文の査読も引き受けて貰わざるを得ないのが現状です。ただ、こうした中で、今年度から著者名と所属を伏せた状態で、査読することになった点は、よかったですと思います。

私の学会誌についての思いは「副理事長挨拶」で触れさせてもらいましたので、お読みいただければ幸いです。「学会」というものの理念は、学問の自由、言論の自由を満喫できる、研究者にとってのパラダイスということではないでしょうか。

これまでの三年間、本学会誌委員会に関する様々な事項に関しまして、橋本光明学会理事長、西村俊夫学会誌編集委員長にいろいろ助けて頂きました。そして特に運営事務に関しましては、藤田英樹現総務部理事に全面的にお世話になりました。また、これまでの学会誌委員の皆様、査読協力者の皆様にもお礼申し上げます。ありがとうございました。

平成 20 年度 国際交流委員会報告

国際交流委員会 委員長 山口喜雄 (宇都宮大学)



1 本委員会の細則と経緯【敬称略】

(1) 国際交流委員会に関する細則

第1条〔目的〕本細則は、国際交流委員会の任務・構成について規定する。

第2条〔任務〕国際交流委員会は次の任務を掌るものとする。

- (1) 学会の国際交流に関すること。
- (2) 海外の学会との学术交流に関すること。

第3条〔構成〕国際交流委員会は次によって構成されるものとする。

1. 委員は次によって理事長がこれを委嘱する。
 - (1) 常任理事会から推薦されたもの若干名
 - (2) 事務局理事 1 名
2. 委員長は委員の互選により選出する。
3. 委員の任期は 2 年とする。

付則 本細則は平成 15 年 10 月 5 日より施行する。

(2) 平成 19 年度末に本委員会の次期役員選出

3 月 17 日(月)、東京文化会館(上野)での本委員会にて、委員長に私・山口喜雄、事務局担当に中村和世(広島大)が推薦を受けた。即決とせず、理事長ほか指導部での審議(5 月 18 日)を経て役員となることにした。

2 本年度の委員構成と委員会活動

(1) 第 1 回 6 月 21 日(土) / 東京文化会館

仲瀬律久(聖徳大)、向野康江(茨城大)、中村和世、山口の 4 名で、次の議題を審議した。

1. 副委員長の選出：アジア担当副委員長に向野康江、欧米担当に直江俊雄(筑波大)を選出。委員は、安東恭一郎(香川大)、池内慈朗(福井大)、金子宜正(高知大)、鈴木幹雄(神戸大)、仲瀬律久、浜本昌宏(名誉会員)、福田隆真(山口大)、福本謹一(兵庫教育大)。
2. InSEA 世界大会 2008 in 大阪での交流状況報告：各委員から国名・発表者・内容などを 600~1200 字程度、9 月 1 日締切で委員長宛にメールで送信。
3. 韓国における四つの学会の整理：福本委員の報告による。

韓国美術教育学会(Korea Art Education Association) = 2003 年 12 月 27 日に大学美術教育学会

との学术交流協定を締

結し、会長は金恵淑先生。

韓国造形教育学会

(Society for Art Education of Korea) = 美術科教育学会が提携予定。

Korean Society for Education through Art(KoSEA) = 日本美術教育連合の韓国版。韓国大学美術教育学会(Art Education Society of National University in Korea) = 名称として大学美術教育学会に近い。前年度 InSEA アジア地区韓国大会は、1・2 が general conference, 3・4 が前半の research conference を担当した。

(2) 第 2 回 11 月 1 日(土) / 高知大学教育学部
金子宜正、福本謹一、中村和世、山口の 4 名で次の二つの議題を審議した。(本頁上が 4 頁の議案書表紙)

1. 国際交流委員会の活動内容とこれまでの経緯
2. InSEA 世界大会 2008 in 大阪での交流の報告
 - 1) 韓国、美術教育の現在：安東恭一郎
 - 2) 子どものためのヴィジュアル・カルチャーと創造性：中村和世
 - 3) 研究発表を契機とした新たな出会い：金子宜正
 - 4) 20 世紀後半の日本美術科教科書研究：山口喜雄

世界大会での四つの交流の中で、「来年度から大学受験で必要とされてきた高校内申点・美術(音楽、体育も同様)を内申から除外するという政府方針が示され、美術教育は急速にその存在意義を希薄化」とのショッキングな報告を受け、安東報告「韓国、美術教育の現在」に議論が集中した。関係者は「政府の方針に対して《音・美・体・教育正常化対策委員会》を立ち上げ、政府に抗議すると共に、署名・デモ活動を展開し『国・英・数』偏重教育に対抗」している。「美術教科書の活用しにくさ」「美術教師の大半が西洋絵画専攻出身」、大学での「欧米式美術教育の影響」が課題とのキムゾン崇儀女子大学名誉教授の言説は、日本と酷似点が多く、本委員会として今後も注視し、広報していく必要を確認した。

学会 Web サイトの開設

芳賀正之（静岡大学）

新たに開設した大学美術教育学会の Web サイト（学会ホームページ）について紹介します。サイトのアドレスは、以下の通りです。

<http://saeu.arrow.jp/wiki.cgi>

学会の Web サイトは、Wiki を使い作成しています。一見、ホームページのようにも見えますが、誰もが自由にページの編集や新しいページを作成できるといった点において、その作業が管理者だけに限られているホームページ作成と大きな違いがあります。Wiki の機能を活かし、広く知られているのがユーザー参加型百科事典「Wikipedia」です。

Wiki による Web サイトのよさは、ソフトやデータがすべてサーバー上に置いてありますので、多数で管理や更新できる点にあります。個人のパソコンで作成し、データをサーバーにアップする方法ではなく、ブログのように、すべてサーバーにアクセスして作業を行います。ログインすればどのパソコンからでもページの作成や編集を行うことができます。

コンテンツについては、学会運営WG委員会で検討されたものを参考にしましたが、現状にあったものを考え、以下のようにしております。

項目別メニュー・・・大学美術教育学会案内 / 全国美術部門案内 / 学会誌投稿案内 / 全国大会・研究発表会 / 全国美術部門協議会

目的別メニュー・・・会員入会・退会 / 美術部門
会員登録 / 学会誌

広報・・・学会通信 / 全国美術部門通信
委員会

その他・・・各ブロック / お問い合わせ / リンク

今後、大学美術教育学会案内のページにおいて、学会の概要を記したいと思います。入会・退会のページについては、手続き等に関する説明を加え、用紙のファイル（ワードとPDF）がダウンロードできるようにしたいと思います。学会誌のページですが、現在、1998年以降の学会誌の表紙と、その目次（研究論文題目）だけを写真で載せてあります。それ以前の号についても、Webサイトに載せていく予定です。トップ画面中央には、「お知らせ」と「最新



Wiki による学会 Web サイト

ニュース」を置き、現在、「お知らせ」では、「美術教育における教科内容学の検討ワーキンググループの設置について」の最新情報を載せてあります。

学会誌投稿案内のページでは、投稿に関する説明を加え、クリックすると用紙のファイルがダウンロードできるようにしたいと考えています。事業計画と報告のページについては、研究大会開催期間における総会後において、資料を載せることとなります。

学会通信のページについては、最新の通信だけを載せておりますが、バックナンバーとして、今まで発行されたものをPDFで載せることを検討しています。

全国大会・研究発表会のページについては、第1次案内、第2次案内等の大会案内や研究発表プログラムを載せていきます。Web サイト上では、添付ファイルとなるので、クリックすると案内のファイルをダウンロードすることができます。

リンクについては、情報発信、交流として、美術教育関係、学会会員の先生方のページにリンクが張れるとよいのではないかと考えています。

管理者については、任期を決め入れ替わることがよいと考えますが、サイトの運営が軌道に乗るまでは、固定したメンバーで運用していきます。参加型・協働型の Web サイトの特徴を活かし、将来的に、大会に関する更新については開催大学が行い、学会誌投稿関係の更新については学会誌編集委員が行い、さらに会員が新たにページを追加・編集したり、情報交換としてサイトを活用することができれば理想です。

平成 20 年度名誉会員の推戴について

総務局長 増田金吾（東京学芸大学）

平成 20 年度の名誉会員候補者として各地区で確認され、所定の書類により学会理事長に申告がなされました。それに基づいて、理事会で審議され、次の方々が「平成 20 年度の名誉会員」として決定し、平成 20 年 11 月 3 日の第 47 回大学美術教育学会「高知大会」総会において報告がなされました。

総会に先立ち、前日の大会懇親会において推戴式が行われました。橋本理事長から推戴状が手渡され、当日出席の元鳴門教育大学教授橋本泰幸氏が名誉会員を代表して挨拶されました。

平成 20 年度名誉会員の諸氏

（括弧内は、最終勤務大学と当時の職階）

橋本泰幸氏（鳴門教育大学教授）

梶田幸恵氏（奈良教育大学教授）

水上喜行氏（大阪教育大学教授）

脇田宗孝氏（奈良教育大学教授）

岡村倫行氏（京都教育大学教授）

森岡茂勝氏（兵庫教育大学教授）

黒田能勝氏（群馬大学教授）

服部鋼資氏（鹿児島大学教授）

関 信一氏（信州大学教授）

名誉会員制度の見直しについて

本制度については、その見直しが検討されてきました。平成 20 年 11 月 1 日の理事会においても、今日的な課題克服の観点からこれを廃止することが提案され、討議の結果、理事会として廃止することが承認されました。

それを受け、11 月 3 日の学会総会においても本件に関する提案がなされ、討議されました。その結果、「学会会則」第 6 章第 16 条「本会に名誉会員を置くことができる。2、名誉会員の申告等に関する規程は、別に定める。」を削除することが、原案通り認められました。発効は、平成 20 年 11 月 3 日です。

第 48 回大学美術教育学会「愛知大会」のご案内

愛知教育大学大会実行委員長

宇納一公（愛知教育大学）

大会の日程が決まりましたのでお知らせします。

1. 会期：平成 21 年 9 月 26 日（土）・27 日（日）

2. 会場：ナディアパーク

デザインセンタービル内

（名古屋市中区栄三丁目 18 番 1 号）

3. 大会開催にあたり

昨年 11 月に開催された高知大会の余韻醒めやらぬ間に引き継ぎが行われ、今年度は開催大学として愛知教育大学が担当することになりました。創造科学系美術教育講座教員養成系教員一同、不慣れながら誠心誠意準備を進めさせていただきます。当初は三河の地、刈谷市を所在地にしております本学を学会の主会場として予定するつもりでございました。しかし、学会員の皆様にせっかく来ていただくならば、交通の便や宿泊施設、文化施設等の充実した名古屋市内で開催してみたらとの若手教員の支持があり、普段は田舎暮らしに慣れております私も頑張って名古屋に行くということになりました。

かつては戦災による市街地の焼失や昭和 34 年の伊勢湾台風による被害に加え、昭和 30 年代から 40 年代にかけての市街地の急速な進展により緑は大幅に減少し、昭和 40 年代末頃には「白い街」と言われた名古屋も、緑化都市宣言やデザイン都市宣言などを掲げて大きく変貌してきました。名古屋駅前ツインタワーや栄のオアシス 21 などの商業施設や、愛知県芸術文化センター、名古屋市美術館等の文化施設以外にも見所が沢山ありますので大会終了後に、併せてご覧頂けると幸いと考えております。

愛知大会を迎えて、東海地区の静岡大学、岐阜大学、三重大学の教員の方々にご協力をいただき、少しでも名古屋らしい、愛知らしい、愛知教育大学らしい大会になることを念頭に準備を進める所存です。

多くの会員の皆様の参加と発表を期待し、充実した大会となることを祈念しております。

事務局よりご挨拶

事務局長 佐藤聡史(東御市梅野記念絵画館 学芸員)

事務部員 柳澤 愛

信州大学・橋本先生とのご縁から平成20年度より、総務局事務部の業務を担当しております。大役をお任せ
 つかりました。非力ではございますが、よろしくお願いたします。

本日は、ご挨拶とともに今後の事務局業務の省力、効率化のために会員の皆様をお願い等がございます。

- 1 メールアドレスは、諸連絡のため必ず事務局へ登録して下さい。また、携帯アドレスではなく極力PC
 アドレスにてお願いします。
- 2 ご退職、ご異動並びにご退会に関する情報、連絡は必ず入れて下さい。
- 3 会費の納入控えは、必ず保存しておいて下さい。

上記につき、皆様のご協力をお願いいたします。

新入会員 三澤一実、佐々木昌夫、波多野達二、西本好男、宮原和香、石景萍、三盃三千郎、
 藤井愛子、佐藤英理子、牧田愛、児玉沙矢華、杉本克哉、庄子展弘、押元信幸、
 武田信吾、加藤蘭、星久美子、矢野真、采翠真澄、棕田敏史、田中圭一、竹内とも子、
 佐々木六、金澤貴子、八木遼蒼、竹田園子、黒木健、阿部吉伸、出佳奈子、小池研二、
 株田昌彦、喜多村徹雄、新野貴則、川原崎知洋、浅海真弓、杉林英彦、徳安和博、和田七洋

日本教育大学協会全国美術部門協議会・大学美術教育学会全国研究大会 開催大学一覧

開催年度	地区								
	北海道地区	東北地区	関東地区	北陸地区	東海地区	近畿地区	四国地区	中国地区	九州地区
I 期		2山形大学 (1953年)	1 東京地区 (1952年) 3 茨城大学 (1954年) 5 東学芸大 (1956年)			6 愛知教大 (1957年)	4 京都教大 (1955年)		7 筑波大学 (1958年)
			8 横国大学 (1959年)	10 金沢大学 (1961年)			9 愛媛大学 (1960年)		
II 期			2 千葉大学			3 奈良教大		1 岡山大学	
		6 福島大学	4 宇都宮大		5 静岡大学				
			8 千葉大学						7 長崎大学
			10 埼玉大学			9 大阪教大			
III 期			13 東学大学		12 愛知教大		11 高知大学		
	15 北海道教大 札幌校	16 岩手大学							14 福岡教大
				18 信州大学					17 広島大学
					21 岐阜大学		19 神戸大学		
			22 群馬大学				20 香川大学		
	24 北海道教大 札幌校	25 宮城教大							23 琉球大学
									26 山口大学
									27 富山大学
IV 期			31 山梨大学		30 三重大学		28 和歌山大		29 徳島大学
	33 北海道教大 函館校	34 秋田大学							
									32 熊本大学
									35 島根大学
									36 上越教大
									37 滋賀大学
									38 愛媛大学
			40 茨城大学		39 静岡大学				
	42 北海道教大 旭川校	43 山前大学							41 鹿児島大
									44 岡山大学
									45 新潟大学
									46 兵庫教大
V 期							47 高知大学		
					48 愛知教大				
		50	49						51
							52		
					53				